

令和7年度 まちづくりトーク 主な意見

開催日10月1日(水)

会場:川地コミュニティセンター

参加者数:31人

◎テーマ①:地域の安全な避難場所

【趣旨説明(川地連合自治会)】

川地コミュニティセンターは浸水想定区域内にあるが、避難所にしてよいか。市役所本庁舎や十日市小・中学校、三次市民ホールきりりなども浸水想定区域内にある。基幹避難所である川地小学校の給食調理場が撤去されたため、防災倉庫と放課後子ども教室になる倉庫を建ててほしいと市に要望しているが、まだできていない。川地地区を災害に強い地域にするために、今後、計画をまとめて市に提案したい。

参加者の発言	市の発言	備考
<p>基幹避難所の川地小学校に至る県道37号線は、上志和地排水機場の先が浸水するため、基幹避難所に行くことができない。改善してほしい。</p>	<p>市長就任後すぐに、県道37号線の改良を県に要請した。県が浸水原因を調査し、改良は難しいという回答であった。現在、流域治水の取組を進めており、江の川の上流部についても、流域水害対策計画を立てている。県に対して、流域治水の事業の一つとして、県道37号線の改良ができないかと提案している。国においても、国土強靱化の予算確保が閣議決定された。最近、下水道の老朽化による大きな事故が発生しており、老朽化した道路や上下水道などのインフラへの対応が迫られている。この地域のインフラについても対応ができるように、引き続き、予算の確保に向けた提案活動をしていく。今後の方向性が決まり次第、速やかに地元の皆さんにも情報提供させていただく。</p>	
<p>上志和地排水機場が約2億円かけて修繕されている。市では、板木川からの排水を想定されているが、今は、小学校側の下川立地地域からの水がきていると認識されている。そのことを認識しながら、2億円を使って同じ能力の排水機場を修理することは疑問である。</p>	<p>現在、国の排水機場国庫補助制度を活用して、オーバーホールをしている。河道の安定化も図っているが、国の事業を大きくすることは難しい状況である。また、流域治水の取組の中で、田んぼダムなどの活用のほか、仮設ポンプ等も整備させていただいている。流域治水全体の取組も含めて、課題を一つひとつ解決していきたい。</p>	
<p>十日市小・中学校を改築して、そこに生徒を集めようとしている。パブリックコメントでは、なぜ、水害危険地域に新校舎を建てて、各地から生徒を集約するのかとコメントをした。その後も、市教育委員会に対して、子どもの安全はどのように担保されるのかという質問をしたが、水害時には、学校は閉鎖しており、子どもは安全との回答であった。また、小学校の校舎は残すのかという質問については、住民の避難場所になついているとの回答であった。何十億円のお金をかけて、そのまま校舎を残すのか疑問である。有事の際も学校教育を続けることができる、酒屋地区あたりに、どうして新しい学校を作らないのか。有事があった学校は当然閉鎖される一方で、有事のない学校は授業を受けることができる。そこに教育を受ける平等はない。安全な場所に学校を造ってあげれば、教育を平等に受けることができる。安全と教育についての考えを教えてください。</p>	<p>子どもたち一人ひとりの安全は、必ず担保する。その上での教育活動である。今回の十日市小・中学校の改築に関しては、浸水想定区域であることから、様々な観点で検討した。一方で、市の施設管理計画において、学校施設は、現在地での建替えを基本としている。この計画以外においても、いろいろなリスクも考えながら、安全を担保する形で、基本構想・基本計画の策定を踏まえて、基本設計や実施設計をしているところである。場所そのものを変えていくことも候補としてあったかもしれない。しかし、様々な観点から検討した中で、できる限りの安全を担保できる建物をめざしている。今後も、地域の皆さんや保護者の皆さんからのご意見に対して丁寧に対応しながら、具体的な取組を進めていきたい。教育は安全第一であることは変わらない。</p> <p>子どもたちの安全を確保するため、いざ災害が起きるという時には、市から、SNSなどの情報提供手段を駆使して、いろいろな災害情報を提供している。小・中学校では、朝に土砂災害警戒情報が出た時点、あるいは警報が2つ以上出れば、休校という運用をしている。また、防災教育や防災訓練を通じて、何かあった時には垂直避難をすることを学んでいる。子どもたちの命を守ることを大前提に、先生と連携しながら、学校における安全を確保していく方法を検討していきたい。</p>	
<p>子どもたちを地元から十日市に送り出すことに不安がある。大雨の際に、十日市小・中学校には迎えに行きにくい、どう対応されるのか。十日市小・中学校の建替え計画と、あり方の見直しとは全く関連していないはずである。十日市地区の地元住民によるワークショップを重ねながら、学校をどうするかと作り上げてきたが、川地地区の子どもたちが通うことになるのであれば、川地地区の住民と一緒にワークショップをするべきである。川地地区が蚊帳の外に感じる。建替え計画はとどまることができるのか、あるいは変更することができるのかと考えながら進めてほしい。予算のことは大切であるが、一方で、安全と天秤にかけすることはできない。子どもの安全を優先してほしい。</p>	<p>十日市小・中学校の改築については、基本構想および基本計画ができたところである。プロポーザルを実施して、設計業者を選定した。ホームページにも掲載しているが、校舎については、2棟式で一つは2階、もう一つが4階という形であり、災害リスクや浸水リスクも想定した基本計画になっている。施設の老朽化が進んでいる中で、事業を止めることは考えていない。子どもたちにとって、よりよい環境になるような学びの場を早くつくりたい。一方、学校のあり方の方針において、現在、保護者の皆さんや地域の皆さんに1回目の説明をさせていただいた。この再配置について、いろいろな意見や質問をいただいている段階であり、今後も、皆さんとの対話の機会を設けていきたい。</p> <p>まずは、今の状況を踏まえて、川地地区から通っておられる皆さんの意見を聞き、必要に応じて反映していくことは可能であることから、しっかりと対話をさせていただきたい。しかし、市立三次中央病院のように、物価高騰に伴い建設費が莫大になるなどによって建設を中断している例もある。有利な財源、いわゆる過疎債を活用して、小・中学校の建設を進めている。特に、十日市小・中学校については、市内の学校の中でも老朽度合いが高い学校になっており、議会による理解もいただき、関連予算を認めていただいている。令和13年以降の国による財源措置については、今のところ未定であることから、有利な国の財源、あるいは起債を活用しながら計画的に進めていく。引き続き、不安なことなどがあれば、いろいろな機会でご聞かせいただきたい。</p>	
<p>川地小学校は避難場所になっており、安全な場所である。JR芸備線に乗って、十日市小・中学校に行くとなると、安全なところから危険なところに行くことになり、親としては不安であり、行かせたくないというのが正直な思いである。十日市小・中学校の建替えを止めることが難しいのであれば、統合を一旦見送って、川地小学校を残す方向で検討できないのか。</p>	<p>あり方の基本方針において、川地小学校は対象ではあるが、現在、再配置に関する具体的な閉校時期は示していない。川地小学校については、今の状況で、しっかりと教育活動を行っていくことが基本である。一方で、今後の児童数の推移を注視していく必要がある。引き続き、三次市全体の学校の魅力化を進めていく。現在は、川地中学校の再編を示しているが、安全が第一である。早めの対応が何よりも必要であるということも、今も、これからも変わらない基本である。校内にいる際には垂直避難で対応することになるが、そうなる前に朝6時の段階で休校を決めて、速やかに周知することを徹底している。どのような状況になっても子どもが災害に巻き込まれることがないように、行政としての施策は確実に実行していく。また、リスクの部分について、しっかりと判断をしながら、速やかな対応と適切な周知を確実に実行し、一緒に子どもたちの安全確保のために取り組んでいく。</p>	
<p>今まで以上の災害が起る可能性がある。市教育委員会と対話をしたいが、回答が不十分である。もっと親身になってほしい。</p>		
<p>板木川は急流であり、雨が降ると一気に押し寄せてくる。また、河川幅も狭い。課題も多いと思うが、河川の浚渫をしてほしい。平成30年災害時には冠水したため、高齢者には自宅2階への避難を呼びかけた。もう一度、危険性がある河川の状況を調査してほしい。昔、国土交通省に堤防のかさ上げを要望したが、難しいとの回答であった。県も厳しい財政状況であるが、今後の協議事項に組み込んでほしい。浚渫工事の順番を繰り上げてもらうことは難しいと思うが、前向きに検討してほしい。</p>	<p>板木川の状況は把握している。平成30年の西日本豪雨災害の時には、非常に大きな被害があったが、護岸のブロックがようやく完成するなど、災害の復旧も落ち着いたところである。河川の堆積土砂の撤去や浚渫などの防災上重要な事業については、引き続き県に対してしっかりと要請していく。国土強靱化5か年計画が今年度で終わる予定であったが、新しく法律が整備されて、令和8年度以降の5年間についても、予算額が確保される見通しが立った。そのような予算を確保することができるように、県などの関係機関に要請して、引き続き安全・安心の事業を進めていく。</p>	
<p>高齢者がどこに住んでいても福祉が充実していること、あるいは地域交通を維持することは心強く感じるため、今後も取り組んでほしい。</p>	<p>—</p>	
<p>約30年前には、市長にハガキを出すことができる仕組みがあり、自分の思いを書いて送ると、すぐに返事があった。今は、市長に直接、意見が言える方法はないのか。</p>	<p>現在、市民の皆さんからいただいた手紙については全て確認している。市民のポストという意見箱も設置しているが、いろいろな手段を検討して、できる限り皆さんの声を把握していきたい。</p>	

開催日10月1日(水)

会場:川地コミュニティセンター

参加者数:31人

◎テーマ①:地域の安全な避難場所

【趣旨説明(川地連合自治会)】

川地コミュニティセンターは浸水想定区域内にあるが、避難所にしてよいか。市役所本庁舎や十日市小・中学校、三次市民ホールきりりなども浸水想定区域内にある。基幹避難所である川地小学校の給食調理場が撤去されたため、防災倉庫と放課後子ども教室になる倉庫を建ててほしいと市に要望しているが、まだできていない。川地地区を災害に強い地域にするために、今後、計画をまとめて市に提案したい。

参加者の発言	市の発言	備考
<p>奥田元栄・小由女美術館の企画展「バンドろぼう展」が好評であった。企画展が開催される前に、「バンドろぼう」を取り上げるテレビ番組があり、全国の方に知っていただいたことも要因ではないか。次回も、テレビ番組などを通して、全国に情報発信した後に、企画展をすれば、人がより多く来るのではないか。</p>	<p>—</p>	
<p>JR芸備線およびJR福塩線を、BRT(バス高速輸送システム)にして、これにより浮いたお金で広島空港と三次市間の直通バスを設けてはどうか。核兵器廃絶運動でノーベル賞を取られた、森滝市郎さんが三次市出身であり、広島平和記念公園に行かれた方に、三次市まで来てもらうことはできないか。経済効果も交流人口の拡大にもつながり、沿線住民も喜ぶ。また、芸備線は、広島駅から被爆された方を三次市に運んで治療されていることから、原爆遺構の一つに類するものとして残してほしい。そして、広島空港からの直通があれば、親の面倒や空き家の状況を見に行きやすくなる。</p>	<p>*君田町の森滝市郎さんや三良坂町の藤川さんなど、最前線で平和活動をされていた方がおられたことは、三次市の大きな宝である。このことを情報発信しながら、平和という切り口の関係人口にもつなげていきたい。 *芸備線の一部区間においては、再構築協議会を設置している。国を交えて、どうすれば地域公共交通を確保できるのか、鉄道の維持に限らず、BRTやバスへの転換なども含めて、実証実験を繰り返しながら、今後の芸備線のあり方について検討している最中である。その検討結果を踏まえながら、今後の再構築協議会の行方を見守っている。また、芸備線は、川地地区の多くの皆さんが利用されており、芸備線の存続ということについては大きな課題であると感じている。芸備線に限らず、地域公共交通の移動手段の確保について、今後どのようにすれば持続可能になるのかということも、住民自治組織連合会を中心に協議を進めさせていただきたい。</p>	
<p>学校の再配置について、今後、市長を交えての意見交換会はあるのか。</p>	<p>要請があれば、地域の皆さんの思いや課題を受け止めながら、今後の計画について意見交換をさせていただきたい。</p>	